始める大手書店の丸善（本社・東京）では、和書百十万タイトル、洋書四十万タイトルを収録したデータベースを画

ができるようにする。同社経営企画室は「これまでの書籍の通信販売は、対象となる本が限定されていた。データベ

んでもらえるようになった」と話している。

　名古屋市千種区に先月末にオープンした「らくだ書店」

末を置いたインターネット体験コーナーがあり、客はパソコンを使って書籍情報を得ることができる。

を置き、座ってじっくり本を選べるようにするという。

　アメリカの書店で座り読み

店まで増えている。

在日アジア女性の悩みを上演

セクハラや家族関係など

在日アジア人労働者とその支援者らが十一日、東京・早稲田の日本キリスト教会館で日本に働きに来たアジア人女性の悩みを寸劇に仕立てて上演する。セクシュアル・ハラスメント（性的嫌がらせ）や日本人の夫の母とのあつれきなどの身近な問題がテーマ。女性の役を男性が演じ、観客や共演男性に女性の身になって理解してもらうのが狙いだ。

　アジア人労働者の支援ネットワーク「アジア人労働者問題懇談会」のメンバーが結成した「女性移住労働者リサーチ&アクション」が開く集会で上演される。

作業中、社長に胸をさわられ、日系ペルー女性（左から三人目）が驚く場面を練習する参加者たち＝川崎市内で

　最初の演目は、農村の男性と再婚したフィリピン女性が、故郷へ残してきた子どもへの送金を夫の母から止められる筋だ。二つ目は生活費を稼ぐため韓国パブで働き始めた韓国女性が主人公。給料を払ってもらえず、得意先の男性客への売春を強要される。三つ目は日系ペルー人女性が工場で作業中に社長に胸をさわられ、驚いた拍子に機械に足をとられ、けがをする。

　支援者の一人の阿津ますみさんは「現実にこうした話は多いが、表面化しにくい」という。女性の悩みは同国人の男性にも理解されにくく「売春や再婚をした方が悪い」と女性の側が責められることも少なくない。

　韓国パブのママさん役で出演するフィリピン女性のレニー・トレンティーノさんは、「日本人と外国人、男と女など立場や言葉の異なる人間が、体を使って演じることを通じて共通の基盤をつくる。フィリピンではよく行われている方法です」。

　集会では、風俗産業や在日大使館職員の家庭で働く家政婦など、労働法の網の目からこぼれがちなアジア女性の労働の問題点を解決する方法も話し合う。

　集会は午後一時半から四時半まで。連絡先は「アジア人労働者問題懇談会」（〇四四―五四九―七六七八）。

室内で飛ばせる紙製ブーメラン

手軽につくれて、室内で飛ばせる三枚翼の紙製ブーメランを、大阪経済大学経営学部の西山豊・助教授（四七）＝数理科学＝が考案した。

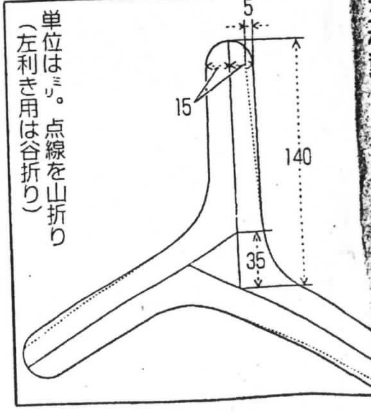
　ブーメランはオーストラリアの先住民が使った武器として知られる。アウトドアスポーツとして人気が高まり、二〇〇〇年のシドニー五輪では公開競技にしようとする動きもある。二年に一回の世界大会には十数カ国が参加する。日本では一九八二年、日本ブーメラン協会が発足し、現在、約三百二十人の会員がいる。

　スポーツ用品店などでも輸入品の競技用ブーメランが並ぶようになった。オーストラリアのおみやげには、五十㍍以上飛ぶものもある。本格的な「く」の字形は飛ばす場所の確保や技術など難しい点も多かった。そこで西山助教授は紙製を考えついた。

　厚めの画用紙か、菓子箱の紙に、型紙（図参照）を写し取り、縁がなめらかになるように切り抜く。三枚の翼の片側を点線部分に沿って山折りにして角度をつけて出来上がり。

　投げ方のコツは「立て投げ」と「回転」。山折りした表面を顔側に向けて立て、一端を人さし指と親指ではさんで持つ。強い回転を与えて押し出すように投げる。そのとき、手首をうまく利かせて回転をつけ、目の高さに投げるとうまくいく。

三枚翼ブーメランの型紙



ひととき

母乳育児への理解を

　十月二十九日付「母乳を強制しないで」の伊藤さん、本当につらい体験をなさったのですね。ただ、誤解してほしくないと思ってペンをとりました。

　ユニセフと世界保健機関（WHO）は、母乳育児推進のため「母乳育児を成功させるための十カ条」を共同勧告しており、これに基づいて「赤ちゃんにやさしい病院」を毎年、認定しています。これは、十カ条を守っている病院ですが、同時に、「おかあさんにもやさしい病院」なのです。

　出産後三、四日ぐらいは、これで足りるのかと不安になるほど、母乳の分泌はわずかです。けれども、赤ちゃんが欲するまま、何回もおっぱいを吸わせているうち、「潮来（ちょうらい）」と表現されるように、あふれるほど、おっぱいが出てきます。そんな母乳の出方を理解しているお医者さんがいて、母乳育児に自信をなくしそうなおか